

第二部「善の研究」 第一章 「純粹經驗」

經驗・・・事実そのままに知ること。

まったく自己の細工を棄てて、事実に従って知ること。

純粹・・・毫こ（きわめて僅かなこと）も思慮分別を加えない、真に經驗そのままの状態。

これは〇〇であるという判断すら加わる前の状態。

純粹經驗・・・直接經驗と同一。經驗の最さいじゆん醇なるもの。

経験を繰り返し、判断が厳密に行われるようになると、純粹經驗の形となる。

間接經驗・・・經驗に基づいて推理せられたる知識（ヴェント）

自分自身が直接その物事に関わったことがなくても、直接經驗に基づいて推理することができる経験。

はじめに

私が「哲学」と向き合うこと、それ自体が純粹經驗の連続ではないかと思います。「哲学」という名称以外は何も知らず、「難しそう」というイメージしかもてませんでした。冊子の本文を読むだけで、文章の読みづらさや言葉の難しさを感じ、いかに自分の知識や経験を結び付けて理解に近づけようかと必死になっても、なかなか理解が進みません。しかし、このことを続けていることこそが「経験」なのだろうと考えるようになりました。以下、西田の「純粹經驗」とどれだけ繋がるかは分かりませんが、私自身の経験を載せたいと思います。

初めてのことは不安

3年間の中学校勤務を終えて小学校にかわった際、初めて学級担任となり「総合的な学習の時間」をもつことになりました。教科書が無いので、何をやるにも「担任が知らないことを授業で行えるのか」「見通しのもてないことをやって学習が成り立つのか」と、不安で、悩み、他の先生の真似ごとしかできませんでした。（真似事すらもできていなかったかもしれません）

不安+経験 → 勇気「やってみよう」

同僚に誘われて、昨年度2月に開催された研修会に参加させていただき、初めての和太鼓体験をしました。過去に太鼓の公演を鑑賞したことはあるものの、「大きな太鼓がある」「“ドン”という大きな音が出る」という程度のことしか知りませんでした。和太鼓のバチを握った際に感じた、太さ、重さ、材質、滑らかさなど、予備知識のない、純粹に感じたことでした。実際に叩いてみると、講師の先生の出す音と自分の出す音の響きや空気の振動が全く違いました。「いったいなぜここまで違うのだろう」と考えながら練習していくうちに分かってきたことがありました。それは、講師の先生が楽しそうな表情で体全身を動かして叩いているのに対し、私は失敗をしないようにタイミングを合わせていくことに精一杯で、腕の動きのみで叩いているということでした。

